

後期難波宮 朝堂院西方地区の調査

難波宮 NW15-1 次調査 現地説明会資料
 大阪市教育委員会
 (公財) 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所



写真7 調査区全景(東から)



発掘調査地全景 (南から)

用語解説

後期難波宮(こうきなにわのみや)

神亀3(726)年から聖武天皇によって造営が始められた宮殿。前期難波宮と同じ中心軸の上に建てられている。大極殿や朝堂院など中心部の建物は瓦葺き、礎石建ちが採用されている。長岡遷都(784年)に伴って廃された。

内裏(だいり)

宮殿における天皇の居住する空間。後期難波宮においては、大極殿院と分離してその後方にあり、外郭は回廊によって区画される。東西174.5m、南北規模は未確認。

大極殿(だいくでん)

大極殿は、即位など国家の重要儀式に際して天皇が御した建物で、後期難波宮の大極殿は基壇を有する礎石建物である。大極殿の位置する区画を大極殿院といい、東西106.2m、南北80.5mの規模である。

朝堂院(ちょうどういん)

さまざまな朝政や儀式が行われた場で、中央の朝庭とそれを取り囲む朝堂からなり、臣下が居した。後期難波宮では八朝堂が配され、周囲には築地塀などが巡る。南には五間門が開いていた。

難波宮年表

645(大化1)年	孝徳天皇難波遷都
650(白雉1)年	前期難波宮造営開始
652(白雉3)年	前期難波宮完成
686(朱鳥1)年	前期難波宮焼亡
726(神亀3)年	聖武天皇難波宮(後期)再建開始
732(天平4)年	この頃難波宮(後期)完成
744(天平16)年	難波宮一時的に皇都に
756(天平勝宝8)年	孝謙天皇難波宮東南新宮に入る
793(延暦12)年	難波宮廃止

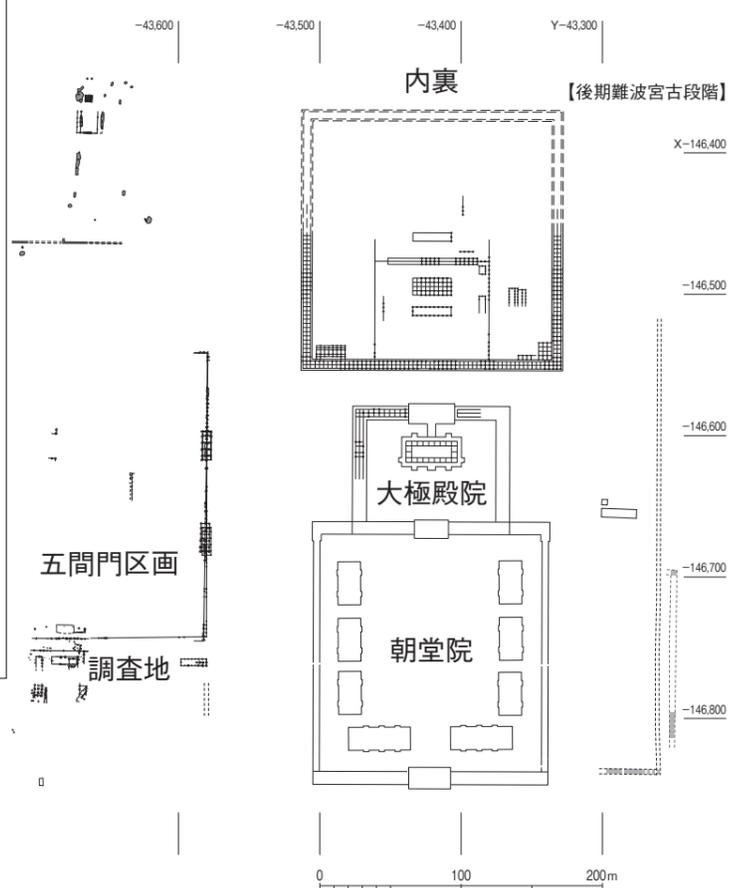


図3 後期難波宮全体図

大阪市教育委員会と(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所(独)国立病院機構大阪医療センター内で難波宮の発掘調査を行ってきました。この場所は後期難波宮の朝堂院西方に当ります。調査の結果、後期難波宮の官衙(役所)と「五間門区画」と呼ばれる施設の一部を発見しました(図1)。

後期難波宮は、732(天平4)年頃には完成したとされています。40年以上にわたる調査によって、内裏、大極殿、朝堂院など中心部分の構造はほぼ解明されていますが、周辺に展開する官衙は発見されていませんでした。今回の調査では初めてこれを捉えました。

「五間門区画」は宮の西方にある区画で、東側に格式高い五間門が2棟設けられていることからこの名があります。今回、南側の区画施設を発見し、そのおおよその規模がわかってきました。

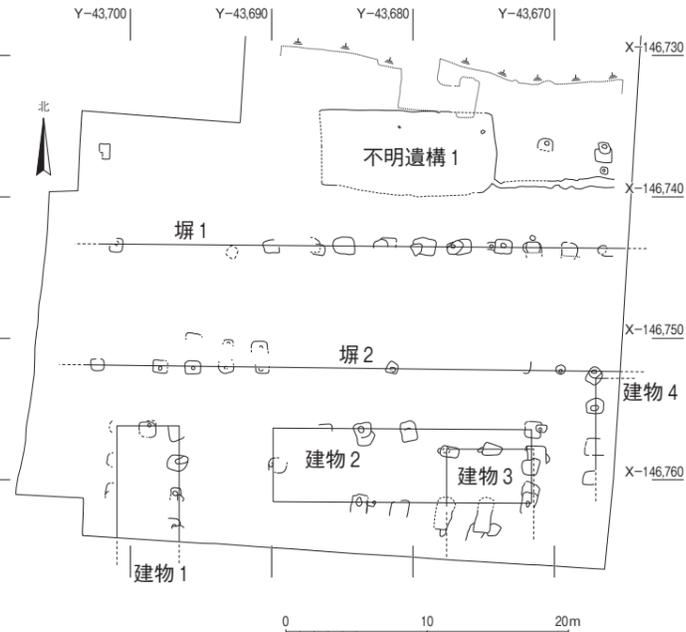


図1 後期難波宮の遺構



写真4 塀1(東から)

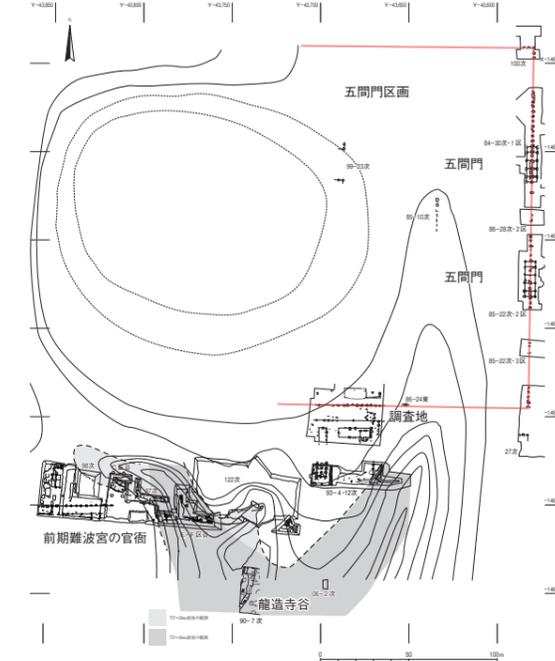


図2 五間門区画と南方の官衙



写真1 建物1(南から)



写真2 建物2(東から)

実務を行う役所(曹司)の発見

塀2の南側で4棟の掘立柱建物を発見しました。建物1は東西2間(4.4m)、南北3間(7.1m)以上の建物です。建物2は南北2間(5.2m)、東西6間(18.1m)の建物です(写真1・2)。建物1・2は塀2と等距離をおいて建てられ、これらは同時期とみられます。建物3・4は調査区外に続き、詳細は不明ですが、建物1・2の下に重なり、より古い時期に属します(図1)。

建物1・2は、塀2の中にコンパクトに配置され、建物の規模も朝堂に比べると小型で簡素であることから、実務的な役所(曹司)に当るものと考えられます。

塀1と塀2は8.8mの間隔で建てられ、その間は宮内道路とみられます(写真3)。この道路を東にたどると、朝堂院西築地のほぼ中央に到達します(図3)。このことは、曹司が朝堂院などと同じ設計で作られたこと、その年代が後期(奈良時代)であることを示しています。



写真3 塀1と塀2(西から)

五間門区画南側の区画施設

五間門は宮城正門など重要な門に用いられるので、この区画も天皇が出御するような重要施設と考えられます。平安宮では、朝堂院の西に饗宴施設である豊楽院が設けられているので、同様な施設とする見方もあります。

これまでの調査で、区画東側は南北約200mにわたって塀が続くことがわかっていました。今回発見の塀1(写真4)は区画南側の塀で、東南の隅から約120m以上続いていることとなります。これによって、五間門区画は南北約200mで、東西にも120m以上の規模をもつことが明らかになりました(図2)。

不明遺構1は、東西12m、南北6m、深さ0.7mの長方形の穴で、丁寧に埋められています(写真5)。瓦葺の建物を建てる時の地盤改良(地業)か貯水施設かともみられますが、その機能はまだわかっていません。



写真5 不明遺構1(北西から)



写真6 旧陸軍の防空壕(東から)

難波宮以外の遺構

難波宮が造られる前の時代(5~7世紀)の柱穴約30個を発見しました。

難波宮の廃止後、中世には、当地は畠として利用されていました。大坂城があった豊臣から徳川の時代(16世紀末~19世紀)には、大名屋敷や町屋が置かれ、住居のほか、深い穴蔵や土探り穴が数多く掘られました。

近代には旧日本陸軍の歩兵37連隊の本部となります。調査区内は訓練などが行われる営庭に当りますが、完全なかたちで残る防空壕や石組溝が目立ちます(写真6)。